

第16回全国支部懇談会 岐阜・養老大会



大塚会長も養老山の頂上でヤッホー



1999 年 (平成 11 年)
12 月号 (No. 655)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目 次

第16回全国支部懇談会……………	1
海外の山……………	3
ウムドン・カンリ峰、ドゥン峰初登頂……………	4
ウィンバーの著作、山岳会など……………	6
報告	
図書委・第8回山を語る……………	8
資料委・山岳博物館等連絡会議……………	8
データバンク研・2000年問題……………	9
総務委・新入会員オリエンテーションを開催……………	9
秩父宮記念山岳賞選考結果……………	9
92同期会・秋の懇親山行……………	10
東西南北	
20年前の富士山大沢崩れ遭難……………	11
富士山高齢登拝者名簿……………	11
俳句・徳本峠……………	12
短歌・秋の彫り充つ……………	12
アニヴィエの谷の魅力……………	12
俳句・上高地山研にて……………	13
俳句・スイス/利尻富士……………	13
玲瓏たる白峰南嶺縦走……………	13
新入会員・図書受入報告……………	14
会務報告……………	15
ルーム日誌・会員異動……………	16
さんけんだより……………	16
図書室からお知らせ……………	17
INFORMATION……………	17

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

■各支部の自慢話で盛り上がる

平成十一年十一月十六、十七の両日にわたって第十六回大会が開催された。この日、全国から二十支部、百五十三名が参加して、大垣市内で懇談会と懇親会を開催し、翌十七日には養老山登山と関ヶ原古戦場見学・伊吹山観光登山の二つのコースに分かれて行った。

十六日午後一時からホテルのロビーで受付を行い、午後三時からホテル内の旭光の間において堀義博、野村百合子、両会員の司会で開会した。はじめに高木碕男支部長が「全国から百五十名を超す多数の方にご参加いただいて賑々しく開催することができ、ありがとうございます」と歓迎の挨拶。

続いて大塚博美会長から「こうした機会を持つことによって支部間の

連携を深め、創立百周年を目前にする伝統ある日本山岳会の発展と振興にお互いが努力しましょう」と力強い挨拶をいただいた。さらに小倉茂暉副会長がアルパータ峰初登頂七十五周年記念のイベント開催、日本山岳会創立百周年記念事業計画など本部の近況について説明された。

次に、かねて、各支部からいただいている「わが支部の自慢話」を中心に、現状説明をお願いした。越後支部の五十嵐篤雄支部長は、「新潟県山岳協会と表裏一体の活動を行っており、山岳協会の事業は、即、越後支部の事業ということになっている。したがって『何もしない支部』というのがわが支部の自慢」とユーモアたっぷりの自慢話から始まって、「日本山岳会創立時の発起人である高頭仁兵衛氏が、戦後間もない昭和二十一年十二月に越後支部を創立さ

れた。氏は申すまでもなく『日本山嶽志』の著者であり、わが支部の誇りである。同氏の功績をたたえて毎年《高頭祭》を弥彦山で行っており、今年で四十二回を迎えることになった」など、伝統のある支部の状況を披露された。

いちいち割愛させていただくが、参加された二十支部から短い時間ではあったが、現状を説明していただき、三時間にわたる長い会議も、冗長に流れることなく、有意義な懇談会を終えることができた。

午後六時半からホテル内の雲海の間に、村田正春会員の司会によって懇親会を開催。はじめに小倉満大垣市長、続いて井上孝二岐阜支部相談役から「岐阜は県民歌にも歌われておりますように、木の国、山の国であります。県内にも多くの見るべき個所があり、大垣市もまた古くから水の都、『奥の細道』結びの地として知られております。これを



挨拶する高木崎男岐阜支部長

ご縁に今後機会がございましたら、ぜひ再度のこ来垣をお待ちしております」と歓迎の言葉が述べられた。続いて大塚会長他による「よいしょ」の掛け声とともに鏡割り、斎藤厚生前会長の音頭で、杓酒の乾杯、ちなみにこの枈は大垣市が全国生産の八〇パーセントを占めているとのこと、お国自慢も披露された。

宴半ばには、大垣市民踊協会の皆さんによる民謡踊りが興を添え、宴がいつそう盛り上がった。会場の一隅では、高木崎男支部長が写した写真の展示もあつて好評を博したことも申し添えておく。

かくして二時間余にわたる懇親会も幕を閉じたが、別室では二次会の席が設けられて五十余人が秋の夜長を遅くまで語り合い、杯を酌み交わしていた。

■快晴の養老山へ百三十五名

十七日、いちばん心配していた天候も、秋雨前線が南に下がって、大陸からの高気圧に覆われ、大快晴の登山日和となった。

五時起床、五時四十分朝食と異常に早い時間も、ホテルの全面的な協力ですムーズに運び、六時三十分には登山コースと関ヶ原・伊吹山観光コースに分かれて出発。

養老山は、標高八五九メートルで、

養老山地の最高峰ではないが、展望絶景の山。孝子伝説で名高い養老ノ滝が登山口である。百三十五名が七時に藤井法道、高木基揚両会員の先導で出発した。

尾根に上るまでは急な山腹をジグザグを切って登るが、やがて尾根に出ると傾斜が緩くなり、ほっと一息。今年は九月、十月の異常高温で紅葉には少し時期が早かったが、銀芒を渡ってくる乾いた風が肌に心地よい。途中の三方山では、眼下に広がる濃尾平野と木曾三川の展望を楽しみ、伊勢湾に浮かぶ船をも望みすることができた。

ここからほんの一投足で笹原峠。これで養老山地の主脈上に立ったことになり、展望も一挙に広がる。やや雲が多く、遠くが霞んでいるものの、東方遙かに恵那山、御嶽山を望むことができ、西には琵琶湖が秋の陽に映えて輝いている。小倉山を経由して南下すると待望の養老山頂に到着。事前に三角点の周りの草を刈って広げたものの、これだけの人数を収容することはできない。グループごとに「ヤッホー」や「バンザイ」でお互いの登頂をたたえあった。

昼食と缶ビールは西側の上石津町から延びてきている林道を使って稜線まで上げているので、これを途中で受け取ってから小倉山で昼食とな

った。憩意の間柄で、車座がいくつもでき、秋日をいっぱい受けながら歓談を重ね、時間の経過を忘れるほどだった。

休憩時間はいつも短く感じるもの。午前十一時、話は尽きないが山頂に心惹かれながら下山を開始。予定どおり午後一時全員が無事養老公園へと帰着して、懇親登山は幕を閉じた。

一方、関ヶ原古戦場・伊吹山観光コースへは、十八名が参加した。まず古戦場を俯瞰できる笹尾山に上がり、地元の史家による関ヶ原合戦の説明を聞いたのち、一等三角点が設置されている伊吹山山頂に到着。西の琵琶湖はもとより、北アルプス南半の山々、中央アルプスの全山を望むことができた。参加された方々には十分に堪能していただけたはずである。

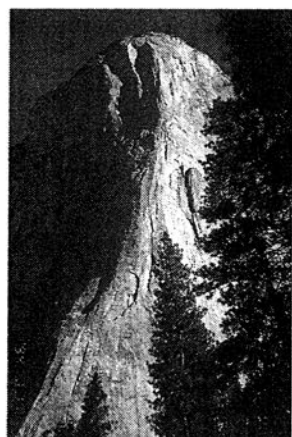
下山後は登山コース参加者と合流するため養老公園内にある養老ランドへと戻った。両コース参加者ともここで着替えを済ませた後、コーヒープレイクを楽しんでから三々五々家路についたのであった。

かくして二日間にわたる第十六回全国支部懇談会は終わった。この行事遂行のために格別のご配慮をいただいた大塚会長をはじめ本部役員、各支部長、そして参加者各位に厚くお礼を申し上げます。(清水芳彦)

海外の山

2000年
エルキャプの世界

江本嘉伸

エルキャピタン (正面が「ノーズ」)
撮影・松原尚之

二十一世紀を祝うか、千年紀を祝うか、である程度国民性がわかる、という論がある。一九九九年の大晦日を盛大に祝うか、二〇〇〇年のそれをより大事にするか、という違いだ。もともとキリスト教の教え方だし、歴史を長いスパンでとらえることに慣れているせい、ヨーロッパでは千年紀をかなり派手に祝うそうだが、日本ではミレニアムのほうは、コンピューターが誤作動する「二〇〇〇年問題」のほうに心配で祝い気分どころではない感じだ。

山や冒険の世界では「ミレニアム

「チョーオユー低価格!二〇〇〇年ポストモンスーン六五〇〇ドル」
「マカルー八〇〇〇ドル k2 (アブルツツイ稜) 九〇〇〇ドル チョーオユーまたはシシヤパンマ 七〇〇〇ドル」
「エヴェレスト国際隊二九五〇〇ドル アマ・ダブラム六〇〇〇ドル」
どれもアメリカの山岳雑誌「Climbing」誌十二月十五日号に掲載されている募集広告で、ヨセミテでのクライミング、カナダやアラスカの登山学校、エクアドルでの登山など地域も内容も多種多彩だ。

各国から十二人の若者が参加する二〇〇〇年記念北極点から南極点まで」という国際的な試みも計画されている。歩行やカヌー、自転車、一年がかりで地球を縦断するものだ。二〇〇〇年を記念してエヴェレストへ、という計画は日本にも北海道はじめ何隊があるが、いま世紀の変わり目に登山の百年をふりかえるとすれば、高峰の住みかであるヒマラヤ、限らない挑戦が続くヨセミテが象徴的な舞台となるだろう(ヨーロッパ・アルプスもアイガーに代表される北壁群への挑戦は大書されねばならないが、いわゆる黄金時代は十九世紀である)。

ヨセミテの中でも、主役はマーセド川から一〇九メートルの高さでそびえる大岩壁エルキャピタンだ。困難なクラック、オーバーハングからなるこの花崗岩の一枚岩の正面は「ノーズ(鼻)」と呼ばれ、困難だがもつとも人気のあるルートとして知られる。

初登攀したのは土木技師のウォーレン・ハーディング。挑戦は一九五七年七月に開始され、パートナーを次々に変えて少しずつ登る方法で高度をかせいだ。ガス・ストープの脚を切ってピトンに代用したり、飛行機の部品と自転車の車輪を利用して荷揚げをする彼らの登攀ぶりを、観光客がつかめて見物した。

結局、一年以上もたった一九五八年十一月十一日、ハーディングたちはついに登りきった。壁にとりついた時間四十七日、一〇〇〇メートルの固定ロープ、六七五本のピトン、一二五本のボルトを使用しての初登攀だった。後になって過剰なボルト使用を批判する声も出た。

前述の「Climbing」誌は、目がくぼみ、髭だらけの登攀中のハーディングの異形をカパー写真に、「ヨセミテの野人」と称された彼(いま七十六歳である)の登攀哲学と、あれから四十年以上たったエルキャプ

の変容ぶりを紹介している。

ノーズではその後、スピードとフリーを競う場となつてゆく。一九六〇年にロイヤル・ロビンズらが固定ロープなしに七日間で完登、一九七五年にジム・ブリドウェルらが一日で完登、八六年ピーター・クロフトとハンス・フロラインがわずか四時間二十二分で登るなど、さまざまな形の挑戦が続いた。とりわけ九三、九四年にあの女性クライマー、リン・ヒルがはじめてフリーで登りきったことは衝撃を与えた。

「二〇〇〇年を八千メートルで」との募集広告とは別の意味で、一九〇〇年代最終ステージの登山とクライミングの状況を、エルキャプのノーズは象徴している。二〇〇〇年代にそこでどんな登攀が行われるだろうか。

ところで、お詫びが一つ。前号のこの欄でキルギスタンという表現があったが、キルギスと訂正します。九三年に国号をキルギスタンからキルギスに変更した。先ごろの日本人技術者誘拐事件でさんざん登場したのに、山の話になるとすっかりしてしまつた。ソ連の崩壊が登山界にもたらしたもの、それも世紀末の大きな課題であつたことを蛇足として付け加えつつ。

東海支部

ウムドン・カンリ峰、ダウン峰初登頂

実行委員長・長坂 博

■第六次中高年高所登山隊

東海支部が派遣したインドヒマラヤ学術登山隊は、スピティ地区の二峰に初登頂した。

ダウン峰について

ラカン峰と思って登頂した山は、約一・五キロ北の無名峰であったことが、帰国後GPSなどの山座同定で判明した。この山は、氷河に入る

とはじめに見える独立峰で、隊では、その山容から、ラカン(現地語で神の家)を守護する近衛兵を表す現地語ドウン(Dhun)と命名して、IMFに申請した。

ウムドン・カンリ峰 (6643m) 北面

東海支部は一九八八年に、中高年を中心とする登山隊をインドヒマラヤに派遣したのはじめとして、中高年層の活性化を図るため、湯浅前支部長、尾上

支部長(当時)の「継続は力なり」を旗印に、一九九七年までに、インドヒマラヤの六千メートル級峰五座に登頂している。

一九九七年に初登頂したクーラ(チャルン)峰の頂上からは、はるか南に連なるスピティ北部の未踏の山々が望まれた。中でも、白く輝く双耳峰に心奪われた総隊長の鈴木は、帰国後ただちに資料収集をはじめたが、長い間登山が禁止されていた地区で、外国隊はもちろん、インド隊の入山記録も見当たらない。当然のことながら、インド政府も詳細な地図は公表していないため、入手可能な小縮尺の地図と、ヒマラヤン・ジャーナルのわずかな記録を頼りの立案となった。

一九九八年の夏に、鈴木木の知人のインド人にキヤラバン・ルートの偵察を依頼、資料が少しずつ集まった時点で、隊員の支部内公募に踏み切ったのである。

応募してきた隊員の登山観、体力、技術の相違から、もう一峰未踏地域から選び、双耳峰は、キャンプ地点のウムドンからウムドン・カンリ峰として、他の山は、ハリユシュ・カパディア隊が南面から試登したラカン峰を、未踏地域の北面からのルートでIMFに申請し、鈴木が総隊長として、両隊を総括することにした。

ラカン峰隊は、学術隊を編成し、一九九五年より実施している周辺地域の第三次環境調査、地質調査を行うことにした。規制区域のため、念のためインドとの合同隊も同時に申請した。しかし多少の経緯はあったものの、日本隊単独で登山許可が下りた。

■二隊ともBC入りは大幅遅れ

標高五五八〇メートルのフラン峠を越え、ラカン峰隊のBCになるカルサ・ゴンマまでは、両隊がいっしょにキヤラバンを進めることにした。しかし氷河越えになるこのルートは、両隊の隊員、インド側スタッフを合わせた三十名を超える人員と、五十頭のポニーが一挙に越えることは困難である。そこで、ウムドン・カンリ峰隊の増井登攀隊長をリーダーとする先遣隊を一足先に出すことになった。

先遣隊のカザ到着直後に悪天候が始まり、マナリ、カザ間の道路が決壊し、本隊はシムラ、レコンピオ經由で四日遅れのカザ到着となった。

フラン峠の大雪でさらにBC到着が遅れ、ウムドン・カンリ峰隊は七日、ラカン峰隊は五日遅れの到着である。十三日間の登山活動日程の中のこの日数の遅れは、精神的にも苦しいものになった。

■速攻登山で登頂

ウムドン・カンリ峰は、先遣隊が悪天候の中であぐら、西稜のもろい岩稜上五三七〇メートルにC1、雪稜上五八〇〇メートルにC2を設営。八月六日に増井、柳原、増井(え)と連絡官、高所ポーター三名が西峰(六四〇〇メートル)に初登頂した。しかし視界が悪く、ここより引き返した。



ドウン峰(6200m)北面

第二登した。

ラカン峰隊は、八月二日に標高五一〇〇メートルのカルサ・ゴンマにBCを設営。四日、五二〇〇メートルにABC、五日には氷河上五六〇〇メートルにACを設営した。六日北壁にルートを通じ、台地状の頂上北西端の六一〇〇メートルピークに田辺、山口、連絡官、高所ポーター三名がアルパイン・スタイルで初登頂した。しかし、この日は視界不

遅れて到着した本隊は、先遣隊のトレールをたどり、快晴の八月八日、C2より西峰を越え、本峰に突き上げる雪稜にラッセルを続け、水野、青戸と高所ポーター二名が初登頂した。頂上からはインド隊の執拗なアタックにもかかわらず、未踏を保っている鋭峰ギヤをはじめ、無数の未踏峰が見渡せた。山口、田村は西峰より引き返した。九日には増井が高所ポーター一名と

良で、この地点より引き返した。

八日、一次隊のトレールをたどり、六一〇〇メートルピークを経由して、台地状頂上を約一キロ南東にたどり、鈴木、田中、志賀、渡辺、高所ポーター五名が六二〇〇メートルの最高点に初登頂した。快晴の頂上からはウムドン・カンリをはじめとしてスピティ北部の未踏の山々が見渡せた。六千メートル級の山へのアプローチに、五六〇〇メートル近い峠越えのキャラバンとなったが、これを高所順応ととらえ、ゆつくり越したことが、BC以上の速攻登山に結びついたと、私は分析している。

隊員名簿

ウムトン・カンリ峰		隊長	水野 起己	(四十八歳)	登山隊長	増井 行照	(五十一歳)	隊員	山口 宏	(六十三歳)	柳原徳太郎	(五十二歳)	増井えみ子	(五十一歳)	田村 茂	(四十九歳)	ドウン峰	総隊長	鈴木 常夫	(六十四歳)	マネージャー	菊地 啓一	(五十二歳)	隊員	田中 守之	(七十歳)	志賀 勤	(六十五歳)	渡辺 元祥	(四十九歳)	田辺 孝	(四十六歳)	小野 久光	(六十七歳)	学術隊長	田辺 孝	(四十六歳)	隊員	山口 孝	(四十六歳)	医師	小野 久光	(六十七歳)
-----------	--	----	-------	--------	------	-------	--------	----	------	--------	-------	--------	-------	--------	------	--------	------	-----	-------	--------	--------	-------	--------	----	-------	-------	------	--------	-------	--------	------	--------	-------	--------	------	------	--------	----	------	--------	----	-------	--------

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13

電話・FAX 03(3915)8110

ウィンパーの著作、山岳会など — 織内信彦氏の「ブルーユにて」を読んで —

近藤 等

織内名誉会員の随想、大変楽しく読ませていただきました。近年はブルーユ(チエルビニア)を訪れる日本人も次第に増えてきて、今夏は大森久雄会員も出かけ、オリオンデの小屋からカレルの十字架までハイキングを楽しみ、チエルビノ(マッターホルンのイタリア名)は「ツェルマットより山の迫力があるのに驚きました」という便りをもたらした。

イタリア側から眺めたチエルビノの山容は、均整のとれたスイス側からのマッターホルンとはまったく異なっており豪放そのものだ。正面の南壁には現在八本ほどのルートがある。中間から下部にかけては落石、プロック雪崩の危険があるが、気温が低いときをねらって私も登りたかった。さて織内氏はブルーユにウィンパーの事跡を讀めるものが何もないのは不思議だと思われるようだが、イタリア人にしてみればライバルのスイスとフランスのガイドにリードされた隊に強引に割り込み、祖国の名峰の初登頂の榮譽を、村で一番の実力者カレルから横取りしてしまっ

たウィンパーに、この名峰の探検に功績があつたと思いたくないのは無理からぬことのような気がする。

■「アルプス登攀記」について

当時のアルピニストが書いた本の中で、ウィンパーのものが最もよく読まれた登山記であることは確かだ。マッターホルンの初登頂後の悲劇のドラマチックな要素が、発行部数に寄与していることは皮肉な事実だ。

一八七一年に初版、同じ年内に再版、三版は一八七九年、一八八〇年には「The Ascent of the Matterhorn」というタイトルで簡約版が出版された。四版は一八九三年にオリジナル・タイトルで重版。この新しい版にはイラスト、また一八八三年までのマッターホルンに関する文章が付け加えられた。五版は一九〇〇年、六版は一九三六年、リプリントは一九四八、一九五四、一九六六年と出版されている。その後のことは私は知らない。

外国語訳はドイツ語版が最初で、浦松さん訳の解説文にある一八九二年は間違いで、織内さんがお書きに

なつていとお、英国で初版が出た翌年の一八七二年に早くもフリードリッヒ・ステューゲル訳によつて『山と氷河行』(Berg und Gletscherfahrt)という題名で出版された。なお一九八二年にこのリプリント版が出た。仏語版は一八七三年、アドルフ・ジョアヌによつてオリジナルと同じタイトルのフランス語書名でフランス最大の出版社のひとつアシェットから出版され、一八七五年には再版された。

この仏訳本は一九七八年にスイスジュネーブのストラトキン・Editions Slatkineのコレクション「Les Alpes et les Hommes」の第七巻としてリプリントで出版された。このコレクションはフランスの登山史家イヴ・バリューの解説で、古くはド・ソーシュールの「アルプスの旅」から、近年はウエルツェンバッハやジェルバズツチなどの作品のリプリントが入つていて大変楽しい。

仏訳本に話を戻すと、一九四四年C・E・エンゲルの訳でスイスのニユーシャテルのEditions Victor Attingerからスイス版とでもいうものが出版されている。訳者の解説によるとA・ジョアヌ(当時、フランス山岳会の副会長だった)の訳があまりにもひどいので、正しい仏訳を出版したのだと書いている。この二

つの訳書は私の手許にある。山岳書の訳者として、両書の訳文と原書を比較してみるのはいよいよ勉強にはなるだろうが、あら捜しをする趣味はないので、今日まで読み比べてみる気にはなれないでいる。

■ガイド・ブック

「アルプス登攀記」の成功ですっかり気をよくしたウィンパーは著述業という新しい職業に精を出すようになった。一八六七年と七二年のグリンランド、アンデス(一八七九、一八八〇)とカナディアン・ロッキーの紀行文を発表し、一八九一年には「赤道大アンデス旅行記」(Travels amongst the great Andes of the Equator)を出版したが、「アルプス」ほど成功しなかった。

非常に好評を得て重版を重ねたのは一八九六年に発表した「シャモニとモン・ブラン山群案内」(Guide to Chamonix and the range of Mont Blanc)だ。地図多数、イラスト六十五、モン・ブラン、ベルトドリユ、ダン・デュ・ジェアン、グランド・ジョラスなど、写真のような緻密さでルート図のように描写されている。

余談になるが「アルプス登攀記」のバル・デ・ゼ克蘭の西稜のイラスト(クリスチャン・アルマーがギャップを飛び越えているもの)だけはあまりにもオーバーで、現実の

西稜にはあのような悪場は存在しない。このことは私自身登ってみて確認している。芸術作品なら山をどのように表現しても自由だが、登山記のイラストは現場に忠実でなければならぬのは当然で、クリーリッジが怒ったのは納得できる。

ウインパーが執筆したシャモニのガイド・ブックは詳細そのものだ。モン・ブランの登山史、イギリスからシャモニまでの旅行法、汽車の時刻表、シャモニの町の解説、ハイキング、モン・ブランはじめ多数の山行、シャモニとクールマイユールのガイドのリストとガイド料金表など、真に実用的な内容で、毎年のように改定されて版を重ね、一九一一年には十六版にもなり、一九一二年には仏訳本も出版された。

またマッターホルンの地区については、『ツェルマットの谷とマッターホルン・ガイド』(The Valley of Zermatt and the Matterhorn a: guide)を執筆し、一八九七年に上梓。このガイド・ブックも一九一一年まで毎年版を重ね、一九一二年には仏訳『Guide à Zermatt et au Cervin』が出版された。

私は残念ながらツェルマットのガイド・ブックは所有していないが、シャモニのガイド・ブックはなかなか面白い。たとえばこんなことが書いてある。

―衣類などについて―

ウールとフランネルが最も実用的。軽い衣類を多く持参して重ね着、または着替えたほうが厚いものを少々よりもよい。山靴が必要だが、出発前に履き慣らしておくこと。現地で登山用の鋏を打ってもらったほうがいい。ナショナル通りのJ・デユクレイがうまい。ピッケルはシャモニかボソンで入手できる。シモン兄弟の製品が安くて最良。

―携行品について―

最小限にしておくのが一番。自分で運べるものだけを持参したほうが迅速で、快適、安あがりの旅ができる。もつとも、宿屋の主人は荷物が少ない者や、何も持たない者はうさくさい眼で見ると、一番悪い部屋しか提供してくれないが。

―ガイドを選ぶには―

シャモニのガイドにはしつかりした連中が多いが、なにしろ二十四歳から六十歳まで三百名以上いる組合だから、力量や性格を異にする者がいるのは言うまでもない。シャモニとクールマイユールでガイドを選ぶとき、私が薦めることはアルプスの他のどの場所にも当てはまる。

一、ガイドを雇う前には、その男のこれまでの仕事ぶりについて知っている者の意見を聞くこと。

二、遭難で知られている連中は避けること。

三、長く困難な登山の場合には、老人や若すぎる者は避け、なるべく中年のガイドを頼むといい。

四、ガイドが必要かどうかは自分の判断で決めるべきことだが、本書で解説した山行をしようとする大多数の読者は、ガイドなしで登るには実力が不足していると思う。

■ウインパーと山岳会

●一八六一年十二月、アルパイン・クラブに入会。

●一八七二、七四年、副会長。

●一八七六年、イタリア山岳会名誉会員。一八八一年、スイス山岳会名誉会員。一八九八年、フランス山岳会名誉会員(ウインパーは誕生日の四月二十七日にノミネートしてほしとヴァロ会長に書状で依頼している)。

ウインパーはアルパイン・クラブのWinter Dinner (年次晩餐会)には常に出席していた。クラブは席を指定してテーブル・プラン(Plan of tables)のついた案内状を会員に発送していたが、一九〇八年十二月十五日、メトロポール・ホテルのホワイトホール・ルームの晩餐会にも出席し、テーブル・プランの紙片に、出席者二百五十三名、このうち知人は四十二名のみ、ゲストはメイン・テーブルに九名と記している。

ウインパーはゲストには✓印、知人は×印をつけているが、Rev. W. Westonの席(ウインパーはメイン・テーブルだが、ウエストン師は入り口近くの末席)にもこの×印をつけているから、ウエストンのことを知っていたことになる(このテーブル・プランはスラトキンの複製版に出ている)。

■ウインパーと女性

一八九九年九月二十一日、五十九歳のウインパーはシャモニで彼よりも十歳年上のシャローロット・ハンベリという女性に出会う。ウインパーが恋心を抱いた初めての女性とされている。翌年の九月まで交際は続いたが、ウインパーは講演会のために渡米、十月二十三日、旅先でシャローロット死亡の報に接した。

一九〇六年四月二十五日、六十六歳のウインパーはわずか十九歳のエディス・E・レウィンと結婚。エセルという女の子が生まれたが、一九一〇年離婚。

なお結婚に先立ち、ウインパーはエディスにひどいセクシャル・ハラズメント、女性蔑視、Virgo intactaの医学検査を強要し、唯我独尊の性格の彼らしく、医者の診察代金の支払いについてエディスといさかいがあったと『ウインパー伝』の著者、フランク・スマイスはC・E・エンゲル宛の私信(一九四〇年二月二十四日)に書いている。

報告

REPORT
12月

図書委員会

第八回山を語る
「美濃の山」について

第八回「山を語る」は「美濃の山」をテーマに、十月二十九日十八時三十分よりルームで開催された。講師は岐阜支部の高木泰夫会員である。

岐阜県は周りを七つの県に囲まれた海なしの県で、北を飛騨、南を美濃と大別できる。美濃には三つの主要河川があり、東よりの木曾川流域には恵那山をはじめ二〇〇〇メートル前後の山が連なっているが、古くから人手が入り過ぎて、山頂まで杉や檜に覆われているものが多く魅力に乏しい。

中心部を流れる長良川、西端を流れる揖斐川の上流域を「奥美濃」と呼んでいる。最高峰は一六一七メートルの能郷白山と高度が低く、ササと広葉樹に覆われた山が重畳として

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

広がっているだけなのが奥美濃である。したがって訪れる人も稀である。

この奥美濃は、何と言っても森本次男氏の「樹林の山旅」(朋文堂、昭和十五年十二月刊)を抜きにして語ることはできない。まさにバイブル的存在で、多くの奥美濃教徒はこれを読んで育ってきたが、今は人手がほとんど不可能である。

この山域は、日本列島がくびれる辺りに当たるので冬の季節風が集中して豪雪が降る。そこで、この雪で藪の押さえられている時期に登ればよいとお考えになるだろうが、過疎のため山麓付近では除雪がされていないから、登山口まで入ることができない。したがって登山は無雪期の溪流遡行が中心となり、地図と磁石を頼りにルートを選んでたどり、山頂に達するといった方法が中心となる。いわばアルプス登山とは一味違う探検的登山を楽しむのが奥美濃で

の山登りの特徴である。この山域に登山者として最初に足跡を残されたのは西堀栄三郎氏で、一九二五年と新しい。その後西堀氏に率いられた第三高等学校や平吉功氏の指導を受けた岐阜農林高等学校山岳部の活躍があった。しかし今と違って交通の便がなく、入山に二日、下山に一日とアプローチに時間がかかるため、時間的余裕のある学生が教員くらいしか訪れることができなかった。

なお、今日ではバスの便もないわけではないが、過疎のため運行回数が極端に少ないので、入山されるときは自家用車で林道奥まで入ることをお薦めしたい、と忠告があった。

「このように標高が低いため、アルプス登山へのステップとしてこの山域が存在する」とお考えの方もありますが、決してそうではなく、それだけで十分に完結し得る魅力を蔵しているのが奥美濃である」と締めくくられた。さらにこの後、Q&Aを含めて文化や伝説、エピソードなどを交え魅力的に語られ、楽しい夕べとなった。

(南井英弘)

資料委員会

全国山岳博物館等
連絡会議を開催

資料委員会は第三回全国山岳博物館等連絡会議を目黒区の東京都写真美術館にて、十月三十日に開催しました。十四名の博物館長、学芸員の方々が出席。自己紹介、各館の現状報告などの後、ちょうど開催中の「山を愛する写真家たち」展覧会場、写真美術館の収蔵庫など、バックヤードの見学をはさんで、午後一時より五時まで、熱心な討議が行われました。

日本山岳会は資料委員会より現在保存中の資料、絵画など品物の整理はほとんど終了し、今後はリスト化を進めてゆく旨を説明。出席者からは資料価値判断の基準、リスト公開についての意見、eメールを通じてなど横の連絡、ネットワーク強化の要望などが出されました。次回平成十二年度は大町山岳博物館で開催することを決め、会議を終了。その後エビスガーデンタワーで行われた懇親会には大塚会長、小倉副会長、吉永常任評議員、山本評議員も出席され、和やかなうちに全日程を終了しました。

(鯉坂青書)

出席者 アルプス山岳館、植村直己冒険館、(財)植村直己記念財団、市立大町山岳博物館、河口湖美術館、田淵行男記念館、武田久吉メモリアルホール、秩父宮記念スポーツ博物館、東京都写真美術館、東京都北区飛鳥山博物館、富山県立山博物館、栃木

県立博物館、伯爵国山岳美術館、日本山岳会資料委員会

データバンク研究会

山岳会における

二〇〇〇年問題と対応

二〇〇〇年一月一日までのカウンタダウンが始まっています。コンピュータの二〇〇〇年問題がいろいろなマスコミ上を賑わしています。こ

の二〇〇〇年問題とは「二〇〇〇年一月一日になった時にコンピュータが一九〇〇年一月一日と認識して誤作動、または、作動しなくなる可能性があり、社会の各場面で混乱をもたらす」ことを指しています。すでに会員の皆さんも自宅や会社などにおいて二〇〇〇年対策を講じておられると思いますが、山岳会においてもこの二〇〇〇年問題が存在し、対応をしてきました。

第二回秩父宮記念山岳賞 選考結果のお知らせ

秩父宮記念山岳賞運営委員会
委員長 竹内哲夫

残念ながら今回山岳賞の受賞業績として該当するものがなく、表彰は見送られることとなりました。

今回審査の対象となったのは、昨年の第一回から引き続き応募いただいたものの四件と新たに応募いただいたものの二件、計六件でした。二年間応募は有効でしたが、五件については今回は辞退の申し出があり、審査対象とはしませんでした。

したがって、十二月四日の年次晩餐会では秩父宮記念山岳賞の表彰行

事はありませんでした。

審査は八月三十一日、九月十四日、二十七日、十月二十五日の四回にわたって慎重に行われ、運営委員会は、審査委員会からの報告を受けて検討の結果、この報告を了承し、会長に結果を提出いたしました。

二回にわたる選考の経験から、いくつかの点で改善することが望ましいとの意見が、運営委員、審査委員から出されており、近くこれらの意見を基にして、山岳賞の「実施大綱」、「実施細則」などの見直し案を作成し、理事会で審議いただくよう準備をすすめています。

秩父宮記念山岳賞が、日本山岳会にとって名実ともにふさわしい賞として定着するように会員各位のご協力をお願いいたします。

山岳会ではコンピュータあるいはコンピュータ内蔵の機器として次のようなものが使われています。コンピュータ機器

事務室、図書室、ロビーの各コンピュータ、事務室のワープロコンピュータ内蔵機器

コピー、FAX、電話、ビデオ、テレビなど（その他にもあるかもしれないがつかみきれない）

山岳会の事務局の事務処理、会計処理を行っているコンピュータが一番の二〇〇〇年問題を抱えています。

昨年度よりコンピュータシステムの更新、プログラムの更新、データの移行、新システムの試行を経て九月から十月にかけて新システムへの切り替えを実施し、二〇〇〇年対応を完了しました。図書室の図書管理用コンピュータについてもプログラム変更の対応をし、とりあえず二〇〇〇年一月一日以降の図書の受け入れができるように対処しました。

コンピュータ内蔵機器としては電化製品はほとんどすべて内蔵していますが、日付が目に見える形で現れる機器が問題を起こす可能性があります。FAX、電話、ビデオについてはこの十一月と十二月に日付を二〇〇〇年一月一日以降にした時の動作の確認をし、必要な場合は対応

をする予定です。

予想外の問題が発生する可能性もありますが、二〇〇〇年の年明け後に事務局でスムーズに仕事始めができるように必要な体制をとる予定です。会員の皆さん、ご安心ください。

(三上博民)

総務委員会

一九九九年上期新入会員 オリエンテーションを開催

十一月六日(土)午後二時より、今年度上期入会者(対象は会員番号一九七一一〜一九三五一までの百八十一名のオリエンテーションが当会

「一人では行けない、でも行きたい。」
それにお応えするのが体験に基づいた
アルパインツアーの旅づくりです。

KLMオランダ航空で行く(ヨーロッパ経由)

キリマンジャロゆったり登頂とサファリ11日間

●東京・大阪発着 ¥560,000~¥574,000

●1/17(月)・1/31(月)・2/7(月)・2/14(月)・2/28(月)発

●名古屋・札幌発着12日間 ¥520,000

●1/12(水)・3/1(水)発(2/27発15日間もあります。)

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員



アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1 (西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444) 3033 名古屋 ☎052(581) 3211 福岡 ☎092(715) 1557



99年度上期の新入会員

ームで開催された。奈良県や岐阜県など遠方からの参加を含め四十三名が出席した。

西村常務理事による開会の言葉ではじまり、大塚会長が歓迎のスピーチで「当会九十五年の歴史と伝統とはどういうものか、積極的に活動に参加され、吸収してもらいたい」と語った。ついで高原理事がビデオを交えて組織・活動について説明。

「山岳会は自分自身で能動的に動かなければ何も得られない。同好会や催しにぜひとも参加してほしい」と述べた。

講演は南川金一山岳編集委員長・百年史編集委員が「山岳会発足のころ」と題し、山岳会小史や当時の探検登山についてエピソードを交えて語った。ご自身による探検登山の報告は、山登りの原点となる興味深い話であった。

その後、新入会員は二グループに分かれ自己紹介、質疑応答を行った。年齢や職業を超えて、より多くの山や仲間との出会いを期待する声が多い。

懇親会では小倉副会長の乾杯ではじまり、ワインや日本酒など新入会員から多数の差し入れがあり、大いに盛り上がった。ブータンからペマ・ウォンデー氏も飛び入り挨拶。同期会の幹事も決まり、和やかな雰囲気でのなかに閉会した。(桑谷美佐子)

92同期会

秋の懇親山行 富士登山

「山麓一帯のススキが原が白い穂波一色に変わり、吹く風に揺れ動くようになったら、どうだね、ひとつ富士山に身をうずめに行こうじやないか」92JACの有志が、一夜新橋で語り合い、十月九日の休日を選び、総勢十名の面々が須走り口五合目に集合しました。

前日に初冠雪があったことを大方の人はニュースで聞いていて、念のためピッケル、アイゼンを忍ばせてきました。しかし当日は、地元の人々も驚くほどの好天に恵まれ、剣ヶ峰付近を除いては、その痕跡さえ認めることができませんでした。根雪になるまでには、もう何回か同じことを繰り返さねばならないのでしょうか。

この季節、山裾にはきのこ採りの人々がひきもきらず押し寄せてくるものですが、頂を目指す人の影はめっきり減って、というよりもほとんど姿を見かけなくなるのが通例です。今回も予想していたとおり、思いきり自然に浸りきれぬ山行になりました。92同期のメンバーはそれぞれ山の靈気を存分に味わえる、ゆとりのある行動を堪能することができました。

実は今回の山行は、同期の一人、大貫金吾さんの三百三十三回登頂をお祝いする会を兼ねています。七合目の太陽館の主人には、この日のために特別に小屋を開けておいてくれるよう早めに依頼していました。夜はここで、鉄人のために祝杯をあげる心積もりで、日ごろ口さがない山

ネパール&チベットレストラン ジャイ
Jay NEPAL ネパール
めいしさエグゼクティブ級!!
11:00am~11:00pm

京葉線海浜幕張駅より徒歩8分

千葉市美浜区打瀬2-12パティオス五番街1F
Phone&Fax 043-213-1192

仲間がそれぞれに日程を工面し、夕方までには小屋にたどり着いておこう、と申し合わせていたのです。

山小屋泊まりのこのアイデアは正解で、熟年組の高度順応と疲労回復にまたとない機会となる余力を生み、翌日全員が余裕を残して登頂の喜びを分かち合うことができました。

ご存知の方も多いと思いますが、山頂の「富士山レーダー」は十月末で三十五年間の活躍の歴史に幕を下ろすことになっています。参加者一同、それぞれの思いを込めて持参のカメラで「富士山レーダー」を背に記念の写真を撮ったことを申し添えておきます。(沼田俊雄)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五、六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

二十年前の富士山大沢崩れ 遭難遺体搬出に立ち会って

宮下喜一

日本山岳会「山」十月号(六五三号)、江本嘉伸氏の「富士山とエヴェレストと中高年」の記事を感慨深く拝読しました。文中にある、御中道剣ヶ峰大沢の崩壊地で起きた底雪崩で、日本山岳会永年会員の中原万次郎氏が遭難され、私はその遺体搬出作業に出動した者の一人です。

記事の中で記録、日時は、私の日記と一致しております。

当日は日曜日で、小雨の降る朝でした。八時ごろ富士吉田警察署より遭難者救助の出動を受けました。すぐ仕度をして署に集合、日大山岳部関係者や署員を含め総勢約三十名で、スバルラインを経由して御庭駐車場

より御中道に入り、大沢休泊所を目指しました。

普通、遭難現場といえは吉田大沢が主だったので、剣ヶ峰大沢での遭難は想像していませんでした。地元でも、二、三日前から御殿場方面から御中道を中心として、次第に西のほうへと搜索の範囲を移動していった。

大沢休泊所に到着した一行は、まず上部の展望台まで行き、大沢の状況を調べました。七合目上部は深い霧のため視界はきかず、小屋の前を降り、大沢中段まで行きました。ここからは対岸の大沢左岸を沢底まで確認できました。

目的の滝壺には日大OBの故三好氏をはじめとする若手約十名が到着、すぐに搬出作業に入りました。私と富士吉田警察署の佐藤正直巡査は見張り役となり、各自笛を持って、何

か変化があったなら笛を吹き鳴らすか、大声で連絡をとるように決めていました。搬出が始まり、滝壺から脱出をはじめたころ、上部の小滝は一条であったものが二条になり、さらに茶色に濁りはじめました。急いで滝壺の隊員に連絡し、搬出を急ぐように指示しました。

雨は休みなく降り続き、全員が大沢中段まで引き上げたとき、大音響とともに沢には幅約五〇メートルくらいの土石流が流れ下ってきました。全員がヘルメットの下からも、雨具の中からも、ただの汗ではない冷や汗が続々と身体の中を流れるのを感じました。搬出作業があと十五分遅れていたなら、滝壺の十名の隊員は帰らぬ人となっていたかもしれせん。

この状況は、逐次警察無線で佐藤巡査が報告し、甲府の県警本部を中継して富士吉田署に連絡されました。文中に「砂塵を巻き上げて」とありますが、当日は雨天でしたので砂塵は誤りであると思います。

五月の中旬でしたので、八合目以上には積雪があり、当日の気温の上昇で雪崩が起き、底雪崩に発達したのではないかと、河口湖測候所では話していました。

当時私は、河口湖測候所勤務の故山本三郎氏が、山と溪谷社の「登山

者のための気象学」の執筆のためのお手伝いとして、何回となく大沢に通っていて、沢の状況などは少しは把握していたため、出動依頼があったのだと聞かされました。

日本山岳会の年報で、偉大な業績を残された故中原氏の記事を読んで、今から約二十年前に搬出活動に協力できてよかったと思います。

平成十一年富士山 高齢登拝者名簿について

水野公男

十月十二日、富士山本宮浅間大社から「平成十一年富士山高齢登拝者名簿」が郵送されてきた。毎年七月一日から、八月三十一日までの二ヵ月間、富士宮口頂上にある浅間大社奥宮に登拝する、数え年七十歳以上の七百十九名が記帳された高齢登拝者の記録である。

名簿はB5判一六ページで、記載内容は最高齢登拝者をNo.1とし、生年月日から順に、氏名、数え歳年齢、登拝回数、性別、郵便番号、住所の八項目に分類されている。

No.1は、明治三十五年八月二十五日生まれの栗原数馬さん、九十八歳、登拝十回目の男性、群馬県太田市在住の人。女性の最高齢者はNo.51中野

俳句

徳本峠

小林碧郎

霜^{しも}々の瀬を涉りつぐ葛の花
とりかぶと胸突^{むねう}二十七曲り
穂高立つ峠の桝^{ます}の熟れそめし
星月夜ランプの火色なつかしき
露濡れて屋根石ひかる朝茜

短歌

秋の彫り充つ

大橋克也

雲重く山は降りいむ源流は木の葉伝
いて腐葉くぐりて

欣びと恐れ^{うれ}の双つの貌を持つ焼石岳
に秋の彫り充つ

両耳^{みみ}がきのこに見ゆる友を追うきく
らげ採りの森の奥にて

賽銭を盗る輩咎むる札の立つ山の祠
を照らしゆく月

山小屋^{やまこ}の真夜^{まよ}に星座を見上ぐれば渡
り鳥ゆく幻影^{まぼろし}ひたひた

すばる座が軌跡を画く真下にて山小
屋は眠る歌声焉みて

千歳さん、大正四年四月二十五日生
まれの八十五歳、登拝八回目、熊本
県宇土郡三角町。

登頂回数上位で見ると、No.1は私
と同年齢の七十五歳東浦奈良男氏の
三百三十三回目、ついで私の百三十
六回目、No.3が近藤禎吾氏七十歳の
九十九回目、No.4は中根武氏七十四
歳、八十九回目、No.5高橋孝行氏七
十四歳、七十三回目、No.6に女性の
石井タツ子さん、七十二歳で女性最
高登拝回数者の七十二回、その次は
ぐつと減って五十八回、五十六回、
四十四回と続いている。

年代別登拝者数から見ると、九十
歳以上は十八名、八十五〜八十九歳
は三十七名、八十〜八十四歳は六十
一名、七十九歳が二十一名、七十八
歳が二十七名、七十七歳は四十七名、
七十六歳は五十四名、七十五歳の五
十名、七十四歳七十五名、七十三歳
七十六名、七十二歳九十一名、七十
一歳百九名、七十歳五十三名で総計
七百十九名(男性五百九十二名、女
性百二十七名)、初めての登拝者は
二百三十九名で、全体の三三・二パ
ーセントであった。

述べ総回数は四千九百四回で、一
人当て六・八二回に当たる。さらに
登拝者数都道府県別上位は東京九十
三名、神奈川県六十五名、静岡五十六
名、大阪四十三名、北海道四十一名、

愛知四十名、福島二十五名、埼玉二
十四名、福岡の二十三名と続いてい
る。しかも兵庫までの十都道府県で
全体の六〇パーセントを占めている。
ただ沖縄からの高齢者の登拝者が一
人もいなかったのは寂しかった。

アニヴィエの谷の魅力

村井 葵

まさにヨハンナ・スピリの描くハ
イジ・ワールドではないか……そう
思いながら私は夢の中にいた。同行
の少女フレデリックは、宙を舞うよ
うに緑のアルプを駆け下りてゆく。
シャモアのようにしなやかなバラ
ンヌだ。草を食む乳牛の群れ、心地よ
いカウベルのハーモニを浴びなが
ら、私は可憐な山の少女を追う。大
気は乾燥して汗は出ない。実に
さわやかだ。足元にはエーデルワイ
スやアルペンローゼの高嶺の花々が
そよ風に踊っている。まさにメルヘ
ンの真つ只中だ。

行く手にはヴァイスホルン、ダン
ブランシュ、オーバーガールホル
ン、ジナルロートホルンの白嶺が
燦々^{きらきら}と降り注ぐ陽光を浴びてまるで
手招くように微笑んでいる。荒々し
く薙ぎ落ちるモーニング氷河さえ一
幅のパノラマの世界に溶け込んで、



アニヴィエ谷 撮影・樽見元雄

やさしく輝いている。ここジナル
はアルピニズムのふるさとでもある。
天然のキャンパスの中央には、神
が巨大な斧を振るって一刀のもとに
断ち割ったとは思えないマッター
ホルンの暗黒の北壁が威風を誇って
いる。昔、私は高差一二〇〇メー
ルのヘルンリ峻を攀じて、下りにか
かったとき、落雷に見舞われたこと
があった。それは命の危うさを痛感
した出来事であった。私は神の領域
を冒した天罰と受け止め、恐れおの
のきながら下山した日のことを思い
出していた。

俳句

上高地山研にて

勝田房治

空抜けて山研にふる秋の音
星明り吊橋わたる梓川
吊橋に仰ぐかぎりの星月夜
星月夜山塊動き穂高起つ
山男らの月の宴に瀬音澄み
山小屋の無月の宴のハーモニカ
天高く山研の鐘一つ撞つ

俳句

スイス

南平吉

秋空へマッターホルン屹立す
マッターホルン近くに置きて一花野
アイガーも雲ひとつなき秋の晴
ユングウラウヨツホの雪を踏みて秋
アイガーの北壁にして粧わず

利尻富士

利尻富士仰ぐ期待に明易し
夏雲をぬぎて全き利尻富士
薫風の窓額縁に利尻富士

それにしてもフレデリックの軽快なシルエットは美しい。絵になる。ここジナルにちなんで、私は彼女を「ジナルハイジ」と呼ぶことにした。

ハイジの舞台、スイス東部のマイエンフェルトには千メートル前後の山しかない。アニメにはアルプスの象徴として白嶺がある。四千メートルを超えるスイスの名峰群と猛たしい氷河が展開している。まさにここがハイジの世界だ、と思えた。アニヴィエの山域は限りなく静かで、無心になれる秘境であった。

ジナルの寒村の頭上には、富士山に近い高さでベソと呼ぶ岩山がそびえている。村の守り神だ。それはナムチェ・バザールの上部にそびえるクンピーラと比肩できる。この双耳峰の岩峰は一九二三年に初登攀されていることを知り私は驚いた。それ以前の二八六〇年代にエドワード・ウィンパーもジナルに遊んでいる。

「アップローチ」隣のマッター谷を詰めたツエルマットは観光客やハイカーでこつた返している。それに比べてアニヴィエの谷は昔ながらの静けさを保っている。ツエルマットからこの谷に入るには、BVZ鉄道でヴィスプに降り、SBB鉄道に乗り換えて、ロース川沿いに隣のシェール

で降りる。バスでアニヴィエ谷を詰めてヴィソワへ、そこからポストバスでジナルに登る。

山歩きはサンリユックからフニクラでティニューザ（二三〇〇メートル）に登り、山の斜面につけられたしっかりとトラバース道をジナルに至る。全行程約六時間。アニヴィエはツアーを組んで入るよりもソロかペア、あるいは少人数でのんびりとアルプス独特の靈氣を愉しむのに適している。ベルコラン、グリメンツ（花で有名）、シャンドラン、ヴィソワなど谷の斜面に散在する集落からもトレッキングが楽しめる。「山」で特集した全国二十四支部の「とつておきの山」に触発されて、私の「とつておきのスイスの秘境」を紹介させていただいた。

(一九九九年夏)

玲瓏たる白峰南嶺縦走

松岡 繁

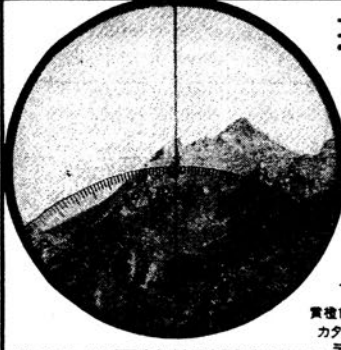
八月二十八日から三十一日まで、南アルプスの転付峠から白峰南嶺縦走をした。誰にも会わず静寂で原始的な充実した山行であった。

一日目、照内豊と身延駅で合流し、奈良田行きバスに乗る。八時半、田代バス停で下車。一三キロのザック

を背負い、猛暑、炎天下を内河内川沿いに緩い登降である。銀色の鉄製栈道、No.758付近は《スズメバチに注意》とあり緊張した。保利沢小屋手前で昼食。小屋からはつづら折の山道が、寝不足ゆえこたえる。十七時ころ、峠直下の水場に到着。照内は天幕を設営し、私は仮設小屋に泊まる。夕食は魚介類やカレーライス、銘酒も嗜み、楽しい晩餐だった。満月に近い月が昇り、心が和む。二十時就寝。

二日目も快晴だ。水を四リットル補給して、六時出発。十分に伝付峠に着く。第一展望台、第二展望台とも重荷に耐えて歩く。崩壊で岩石が

コンパスグラス HB-3
広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのままだ正しい磁気方位です。



重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
黄褐色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

林道を塞いでいる。弟切草の黄色い花が美しい。鋭くそびえる北岳を眺め、仙塩尾根から塩見岳、蝙蝠岳への長い稜線と、千枚岳から荒川三山、赤石岳、兎岳方面、そして富士山が見える。絶景に感激、幸福感に浸る。

唐松がシラビソの樹林に変わった。奈良田越えて林道は終点、平坦な台地だ。細い山道となるが、踏みあとは明瞭だった。うれしくなる急坂を登り、白剥山の頂上に到着。

石楠花や深山ハンノキが多くなる。黒河内岳南嶺の手前は、岩屑と露岩帯、岩礫、這い松の樹林帯だ。倒木を跨いだり、潜ったり、藪こぎと苦労した。黒河内岳(二七三三メートル)の北峰は岩屑、岩礫のピークだが、展望は一段と優れ、大バノラマに嬉し涙が出る。

十六時に北峰に到着し、天幕設営ののち質素な夕食をとる。生野菜は格別にうまい。夕暮れに高峰の山々が輝き、理想郷に惚れ惚れする。

三日目は六時に笹山テント場を出発した。今日は高峰や前方の山々を越えて農鳥岳(三〇二五メートル)に登るのだ。心と体に喜びと活力がみなぎる。程なく這い松の藪こぎとなる。樹齢数百年の太い這い松帯を赤布頼りに悪戦苦闘だ。顔には傷、手や服は松脂だらけだ。白河内岳はだだっ広い。降雨や濃霧の際はルート選定と行動に細心の注意が必要だろう。

大籠岳を過ぎ、広河内岳までまた岩屑と露岩の急坂が続くが、足元の小さな花に心が和む。大門沢下降点にザックを置いて農鳥岳を往復した。十七時過ぎ、大門沢小屋に到着。ここでも天幕を設営。

四日目は七時に幕営地を出発。急勾配の八丁坂を通り、大古森沢から発電用取水口を過ぎ十時半に奈良田温泉郷に着いた。入浴し、山菜そば定食やビールで乾杯。全行程晴天に恵まれ、岳友よし、絶景もよし。珠玉のような山々を登高し、人生の活路を得て大いなる収穫、自然と太古の趣に感謝した。

図書受入報告 (1999年10月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
武田文男	冒険物語百年 (朝日文庫 No. 17-3)	323pp/15cm	朝日新聞社	1999	出版社寄贈
高橋サブロー	サランコットの朝方に：山男の独白 (詩編と詩論)	179pp/15x22	詩画工房	1999	著者寄贈
佐々木民秀 他 (編)	利尻山・礼文岳登山報告書 (平成9年7月4日～11月8日)	34pp/26cm	JAC秋田支部	1999	発行者寄贈
大阪明星学園 (編)	布打剛日峰 (ブータカンリ) 登山報告書1998年	119pp/26cm	大阪明星学園	1999	発行者寄贈
加藤則芳	ジョン・ミューア・トレイルを行く：バックパッキング340キロ	381pp/20cm	平凡社	1999	出版社寄贈
村上義千代	あおもり110山	235pp/26cm	東奥日報社	1999	著者寄贈
兵庫県山岳連盟 (編)	兵庫県山岳連盟50年のあゆみ (1999年)	138pp/26cm	兵庫県山岳連盟	1999	発行者寄贈
中津川勤労者山岳会 (編)	キナバル楽術登山報告書：中津川勤労者山岳会創立30周年記念	75pp/30cm	中津川勤労者山岳会	1999	発行者寄贈
天城敏彦・森達弥 (編)	寧金抗沙峰：HAJニンチンカンサ登山隊1997年登山報告書	62pp/26cm	日本ヒマラヤ協会	1999	発行者寄贈
小糸製作所山岳部 (編)	夢氷河を超えて：モンゴル・フィティン峰登山報告書	96pp/26cm	小糸製作所山岳部	1999	発行者寄贈
JAC山陰支部 (編)	鳥取県境の山	147pp/21cm	JAC山陰支部	1999	発行者寄贈
森田宏 (編)	ネパール語小辞典 [第2版]：簡易ネパール語文法・会話例文付	355pp/18cm	森田宏 (私家版)	1999	著者寄贈
西村秋二 (編)	速攻アンナプルナIV峰：1998年九州アンナプルナIV峰登山隊登頂記	95pp/26cm	芳山九州地区協議会	1999	発行者寄贈

会務報告

十月理事会

日時 十月十三日(水) 十八時三十分

二十時四十五分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(葵)、南川(高遠代理)、宮下、鰺坂、松原、増山、坂井、河西、坂本各理事、神崎監事、平山、中川、吉永、田邊各常任評議員

〔委任〕 山本理事、中村監事、平野常任評議員

〔審議事項〕

一、大塚会長の「秩父宮勢津子妃殿下レリーフ建設委員会」への顧問就任要請について(西村)

同委員会(会長・加藤博康秩父宮会会長、副会長・浅見豊秩父山岳連盟会長、中山高嶺三峰神社宮司)より、顧問就任依頼があった。レリーフは平成十二年六月の秩父山開き式をめどに建設する予定。承認
二、永年会員の資格認定の一部見直しについて(西村)

定款第六条第四項「本会入会後在籍継続五十年に達した者」の認定条件で、従来「十二月まで在籍継続五

十年に達した者」だったものを「当該会計年度末(三月)までに在籍継続五十年に達した者」とする。よって一〇三月入会の会員(ただし五十年目の会費納入を前提とする)も対象とする(本年度対象者増は四名)。今まで一〇三月入会者で翌年十二月永年会員になった会員に会費を請求するトラブルがあった。承認

〔報告事項〕

一、平成十一年度(第二回)秩父宮記念山岳賞について(竹内副会長)

九月十四日、運営、審査(合同)委員会を開催。

①本年度応募二件、前年度の四件計六件の審査をした結果、表彰対象としては今一步の評価となった。

②十月二十五日、運営・審査(合同)委員会を開催し、審査過程での問題点などを整理し、最終結論とする。
二、平成十一年度年次晩餐会について(西村)

①十二月四日十八時より新高輪プリンスホテルで、会費一万五千元、飲食は和洋中ミックスとする。

②催事企画 (a)同好会による「山の絵」「山の写真」、(b)ヨシダテントの協力による「テントの歴史展」「ミニテント実物展示」、(c)報告は学生部の「日中学生友好登山隊」「カナダアルパインプロジェクト二〇〇〇」、その他。記念山行は筑波山(集委

員会)を計画。

③常設コーナーは例年どおり「グッズ販売」「ダウンジャケットなど」、「ドリンクコーナー」は例年どおり。

〔支部動向〕

一、秋田支部四十周年行事(十一月二十、二十一日)大森副会長出席。

二、東北地区集会(十月二十三、二十四日)主管・青森支部、大塚会長出席。

三、全国支部懇談会(十月十六、十七日)主管・岐阜支部、大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、森、坂本、西村各理事出席。

四、木暮祭四十周年記念行事(十月十七日)主管・山梨支部、大森副会長が講師として出席。

〔委員会報告〕

総務委員会・高原

●十一月六日、新入会員オリエンテーション開催。対象者は一二九七一一三二一までの百八十一名。講演は南川「山岳」委員長による「日本山岳会発足のころ」を予定。

●九九年度版会員名簿は十二月四日発行予定。

財務委員会・村井(龍)

●本年度上半期の予算執行状況はほぼ予定どおり。

●全国支部懇談会への援助金は二十万円(昨年は十五万円)とする。
●JACホームページアクセスの対

応は、当分の間リアクションしない(今後ホームページの内容も含め、管理体制を整える必要がある)。

会報編集委員会・村井(葵)

●十月号巻頭原稿は江本嘉伸会員の「富士山とエヴェレストと中高年」。図書委員会・宮下

●平成十二年二月に「同志社大学山岳部七十年の歩み」を開催予定。指導委員会・松原

●岩登り研修会(十一月五、七日)。自然保護委員会・河西

●自然保護全国集会(九月十八日)栗駒高原で開催した。議論沸騰。

●文化庁に早池峰の全国高校総体山岳競技実施後の調査結果を十月六日口頭で報告。

学生部・宮崎

●日中学生友好登山隊は九月三日出発、二十二日無事帰国。雪宝頂登山は日本側隊員六名(九名中)が登頂。十月十五日、報告会を予定。

●第五回大学山岳部監督会議(十一月十三日、十三時より)開催。

●皇居周回マラソン(十一月十四日)。山研運営委員会・坂本

●今年度の山研利用者数は九月末で六百五十九名(昨年は五百四十二名)。九月十五日の釜トンネル出口土砂崩壊により百十名がキャンセル。

●三水力発電計画実行委員会・坂本
●計画の進行状況は各省庁への許可

申請を経て十月十八日工事着工、十一月十日までに発電装置および送水・放水管を設置、十二、十三日試運転。本格運転は来年五月初旬。

海外連絡委員会・増山

●台湾大地震 (九月二十一日) で山岳遭難を引き起こし十五名の犠牲者が出た。藤平元会長を代表とする募金活動を実施中。十月二十三日告別式、当会として弔意を表す。

●インド登山財団 (IMF) 総会 (十一月十二、十四日) へ大塚会長、増山が出席、十分間当会の話をする。その他・西村、高原

①第二回評議員会開催 (十月三十日)、議題は名誉会員の推薦など。

②十月二日、上高地山研で同好会「ジャック93」の集会有り、解散後参加者の一人が山行予定を変更して連絡を怠ったため遭難騒ぎとなる。こうした事件の増加が危惧される。

ルーム日誌

10月
4日 総務委員会

5日 遭難対策委員会 アルパイン

6日 フォトクラブ 山げらの会

7日 アルパインスケッチクラブ

データバンク研究会 学生部
総務委員会 山の自然学研

12日 常務理事会 二火会 アルパ

13日 インスキークラブ

13日 理事会 新日本山岳志研 会

13日 報編集委員会 アルパインス

13日 キークラブ 95同期会

15日 学生部・日中友好登山隊報告

18日 総務委員会 資料委員会

19日 海外連絡委員会 集会委員会

20日 アルパインスケッチクラブ

20日 山研運営委員会 ミニ水力発

20日 電実行委員会 財務委員会

21日 三水会

21日 科学委員会 学生部 フィル

22日 ムビデオ委員会

22日 緑爽会

25日 秩父宮記念山岳賞運営委員会

25日 アルバータ実行委員会 総務

26日 委員会

26日 自然保護委員会

27日 アルパインスキークラブ

27日 学生部 98同期会 ミニ水力

28日 発電実行委員会

29日 図書委員会

30日 評議員会 財務委員会

10月来室者628名

■会員異動

物故

岸田権二 (三三〇四) 99・10・18

秀島 敏 (二〇五六七) 99・10・28

桑原信夫 (四六九〇) 99・11・20

退会

深沢百合子 (八六二二) 99・10・30

さんけんだより

奥又白池山行

管理人・木村弥生

十月のある日、休みを利用して夫

の太郎と、上高地で働いている友人

のオミツさんの三人で、奥又白池へ

行ってきました。奥又白池は穂高中

腹二四〇〇メートル付近にあります。

山好きが集まっている上高地の若い

従業員たちの間でもあまり行った人

がおらず、奥又白池へのルートを話

してくる人が周りにいなかったこと

とが、私の悪夢の始まりでした。

天気はすばらしく、気分も上々。

奥又との分岐で今日のコースを確認

しました。山登り初心者の方は地図

を見ても「急そうだな」くらいしか

わかりません。コースは点線になっ

ており、熟達者向けです。単純な私

は「ワイー、奥又に行けば私も熟達

者だ」と舞い上がっている始末。

そんな私を尻目に、夫とオミツさ

んは地図を見ながら山を見上げ、ル

ートチェック。「ここから一時間ほ

ど歩くそうだけれど……」と二人。

でもどんなにヘビーでも一時間なら

大丈夫、大丈夫、と出発しました。

歩くこと四十五分、両手両足を使
い、這いつくばって、時には「これ
はロッククライミング？」と思うよ
うなところを登ってやつと休憩。
「ワイルドなジャングルジムって感
じで面白いね。焼岳の梯子も好きだ
けれど、奥又の道もスリリングで楽
しいね」と一人で大はしゃぎ。

しかし私に笑顔があつたのはここ
まで。「もうすぐ着くよ、もうすぐ」
と言われ「これが最後の巻き返した
ヨ」と何度もだまされ続けること三
十分。「一体もうすぐっていつ？
地獄の案内人、太郎&オミツめ！」
と一人たわ言のように呟く私。

そして本当にもう限界というとき
に、真っ青な奥又白池が目飛び込
んできました。到着したとたん、そ
の美しさに涙がぼろぼろとこぼれて
止まりません。三人で万歳をしなが
らも、帽子のつばに顔を隠して一人
涙していました。

奥又白池への道は、私にとっては
裏切りのジャングルジムでした。た
だ目をつぶると奥又白池の青さが今
も瞼の裏に広がってきます。

※

今年の山研は、ミニ水力発電工事
のため、例年より二週間ほど遅れ十
一月十五日閉鎖しました。来春のこ
来訪をお待ちしています。

図書室からお知らせ

●図書室開館時間を変更

図書室の毎週月曜日休館制度が11月の理事会承認によりなくなりました。今後は事務局業務時間と同様にご利用いただけます。

図書室開室時間

月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第1・第3・第5土曜日 ……

……………10～18時
第2・第4土曜日 ……閉室

●洋書の寄贈を受けました
京都支部の薬師義美会員より、ロシア語、ポーランド語を含めた洋書19冊とカラコルムの地図1組をご寄贈いただきました。ご利用ください。

◆第二十八回山岳史懇談会

図書委員会

日時 平成十二年二月十八日(金)

場所 日本山岳会集会所

講師 平林克敏会員(評議員)

演題 同志社大学山岳部七十年の歩み(VTR化された歴史)

◆二〇〇〇年日本山岳会東北地区集会開催

樹氷の美しい二月に、蔵王で東北六支部の懇談会を開催します。

期日 平成十二年二月五日(土)～七日(月)

主管・山形支部

送金先 山形銀行東支店 普通〇

一四一―一三五 (社)日本山

INFORMATION



イラスト・村上直温

場所 蔵王スキー場

宿泊 パラダイスロッジ(山形市蔵王中央高原片貝沼畔) Ⅷ・〇

二二―六九四―九三三二

日程

二月五日

集合 パラダイスロッジ

受付 十四時

支部連絡会議十六時三十分

交流会 十七時三十分

二月六日

①自由行動

②シール班(ツアー)

③ゲレンデスキー

一泊参加者Ⅱ三々五々解散

二月七日

二泊参加者Ⅱ朝食後解散

参加費

①一泊希望 一万五千円(二食)

②二泊希望 二万五千円

送金先 山形銀行東支店 普通〇

一四一―一三五 (社)日本山

岳会山形支部長・木村喜代志

申込締切 平成十二年一月十日まで

送金を持って締め切り

参加申込 千九八八―〇一三 酒

田市東泉町三一―四―一

山形支部事務局 佐藤淳志

Ⅷ&Ⅷ・〇二三四―二四―〇

四三二

◆六日町周辺クロスカントリースキーツアー

二〇〇〇年四月に六日町温泉国際ユースホテル内山所長のご尽力を得て、越後の山々の眺望を楽しむツアーを催します。皆さまご参加を。

期日 平成十二年四月七日(金)～九日(日)

(出発 四月七日上越新幹線東京発二十時七分、六日町着二十一時五十二分、迎車あります)

場所 六日町魚沼スカイライン他

宿泊 六日町温泉国際ユースホテル(二泊五食) 新潟県南魚沼郡六日町大字小栗山一九二〇

―

Ⅷ・〇二五七―七二―二八四二

費用 二万円(貸しスキーあり)

申込 ハガキで山本良子宛(新潟県南魚沼郡塩沢町姥島新田七九五 グランドウィング舞子高

原四四〇)

申込締切 三月二十五日(土) 先着順

*申込者には詳細を連絡します。

◆編集後記◆

晩餐会も終わり、いよいよ一九〇〇年代の終焉。二〇〇〇年も秒読みです。ミレニアムの歴史的な瞬間に立ち会えることをともに喜びたいと思います。

今年最後の会報は巻頭に、全国支部懇談会の報告を掲載しました。昭和十年(一九三五年)誕生の関西支部を皮切りに、現在は二十四支部と盛り上がりを見せています。

各支部独自の個性豊かな「支部報」の発行には敬意を表しますが、当会報の「支部だより」にも担当者をおくなどして、ぜひ投稿をお願いいたします。全国会員へのPR、併せて支部の活性化にもつながるのでは……と思います。テーマは山行や支部の行事に限りません。写真やイラストも添えて一〇〇〇字程度の原稿をお待ちしています。

会員の皆さまの無事越年と来る年のご活躍を念じています。(村井)

日本山岳会会報 山 655号

1999年(平成11年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社